

2020年度 静岡県言語聴覚士会 全体研修会 開催

2021年1月31(日)に、Zoomを用いたオンライン形式にて、2020年度 静岡県言語聴覚士会全体研修会を実施しました。今年度は、新型コロナウイルス感染予防の観点から、静岡県言語聴覚士会全体研修会としては初のオンライン形式となり、それに伴い参加申し込みやアンケートも Google フォームを使用する等、新しい生活様式に即した方法に変更しました。

9:50～10:40 「語音聾を主症状としたウェルニッケ失語症の経過」

発表者：遠州病院 高荷 万梨子
進行役：丸井 美奈

脳梗塞により語音聾を主症状とした Wernicke 失語を呈した 40 代女性について、急性期から維持期にかけて約 1 年半経過を追ったケースについての症例検討を行いました。初回評価で聴理解に比し読解が良好であったことから、病棟の他職種・ご家族に書字の利用を促すことで日常のコミュニケーションが可能になりましたが、語音聾により他者への言葉かけに反応したり、勘違いしたりする事が起こっていました。語音認知の課題を中心に行うことによって急性期から回復期にかけて改善がみられていましたが、病識の欠如により入院継続が難しく、早期退院しデイサービスと外来リハビリの利用となりました。退院後前半は入院時と同様に語音認知の課題を中心に行っていましたが、2 週間に 1 回に頻度変更した後半では聴覚把持課題・文レベルの単語の聞き取り課題に内容を変更し実施しました。初回評価から最終評価まで 5 回の SLTA の結果を追いながら報告され、入院から外来リハビリを通じ、悩みながらも評価を丁寧に重ねプログラムの再検討しながらリハビリを実施し着実に改善が見られている様子が、うかがえました。今回は①急性期のコミュニケーション方法やリハビリ内容についてより効果的な方法はなかったか、②病識が欠如した方にリハビリの必要性や病気の説明をどのように行っていけばよいのか、③外来で 2 週間に 1 回の頻度となった場合に目標や内容をどのように設定していけばよいのか、の 3 点について助言の希望がありました。①のコミュニケーション方法については病棟で文字の使用を促すことが効果的であった事を再確認したうえで、スマートフォンのアプリの音声入力機能を使用しご本人の発話を文字化して確認を促したり、ワードの画面を共有する方法などの提案がありました。リハビリ内容についてはトップダウン処理も同時に行うことでより効果的なリハビリができること、動詞や復唱の困難さに対して誘導副詞文を用いた復唱練習が効果的などの助言がありました。②については、発表者から SLTA の結果説明をご本人だけでなくご家族にも行ったと話がありましたが、病棟スタッフの協力を得ながら本人が困っている時にその場で「今、困っていませんか？」と声かけし自覚を促すことや訓練以外の時間をどの様に過ごせるかによって入院生活を耐えられるか限界を迎えるかが変わってくる、という助言がありました。③については、急性期から維持期まで継続して担当ができたことが、ST として良い経験となったとの意見やデイサービスのスタッフと情報共有していく事で普段の生活の中でも効果的な声かけや支援を受けられるようになるため、色々な人を巻き込んで進めていくと効果的、との助言がありました。

アンケートの感想

- ・資料が見やすく、発表も分かりやすかった。
- ・3 つのディスカッションに分かれていた為、聞く側も情報を整理でき分かりやすかった。
- ・語音聾は難渋する印象があるため、ここまで経過を追えたのは素晴らしいと思う。

- ・言語機能の向上に集中してしまいがちであるが、患者の周囲環境をよりよくするためにコミュニケーション方法の伝達や他職種への情報提供・共有・相談・目標設定等、行うべきことはたくさんあると感じた。
- ・周囲の方たちのコミュニケーションスキル向上に ST が果たす役割の重要性を感じた。
- ・病識欠如の方の説明は私自身も悩んでいたのも、先生方からのお話を聞いて良かった。

10:50～11:40 「両側性感音難聴と知的障害を合併した児の構音訓練の経過」

発表者：沼津市立病院 芹澤 健太郎
進行役：静岡県立総合病院 上田 裕子

構音不明瞭を主訴に来院し、聴力検査を実施したところ高音漸減型の両側性感音難聴を認め聴覚特別支援学校での補聴器作成と並行して言語療法を開始し、現在までの約1年半構音指導を実施している知的支援学級在籍の小学生女兒について症例検討を行いました。院内臨床心理士が実施した WISC-IVは全検査 IQ44 で、中等度知的障害を認めました。初回評価時の構音の誤りとしては、会話時・構音検査時に音の置換 (/s/が/t/、/z/が/d/) とイ列音の歪み、/l/の弱音化を認め、口腔器官運動としては口唇と舌の巧緻性の低下がみられました。構音の文章検査では文章の後半部分の単語や文の読み飛ばしを認め、注意機能やワーキングメモリーの影響も考えられました。週に1回40分の構音訓練を現在まで継続して行い、訓練開始1～2か月は聴覚弁別訓練と口腔器官の運動練習も行いながら、サ行の構音訓練を現在まで実施しています。構音訓練は口腔機能運動の拙劣さやワーキングメモリーと注意機能の低下の影響により正しい動作が習得できず難渋しながらも徐々にステップアップし、現在はサ行の単語の構音が可能となり短文練習まで進みましたが文の後半に省略や置換が多くみられ、二語文でも省略や置換がみられていることが報告されました。家庭では国語の音読練習でサ行の言葉を意識して音読できるようになり、家族や友達との会話で聞き間違えられることが減った等の日常生活のコミュニケーションで構音改善を感じています。発表者からは、①現状の訓練方法が適しているのか②他の訓練方法があるかについて助言の希望がありました。まず全体像の把握に関して、小児では成育歴・診断時期・難聴の程度などの確認が重要であるため、保護者が若しくは許可を得た上で直接施設に確認して情報収集をすることで状況把握がしっかり行えるとよいと、助言がありました。また、言語能力の把握について言語検査の必要性と ST の視点での患者理解をしていくことの重要性について話があり、今後言語面への対応をどのようにしていくのかも検討していくほうが良いのではないかと助言がありました。構音障害については、知的障害を合併していると効果が出にくく理解力の底上げが必要、教科書通りに丁寧に構音訓練を進めてきている点は、とてもよいが、子どもの状態に合わせて別の誘導方法を試したり、方向性の見直しを柔軟に行っていくことも必要と話がありました。難聴については、機能的構音障害ではなく難聴が原因でイ列の歪みが起こる場合があること、高音漸減型難聴の場合は/s/の音のイメージが確立していない可能性が高く、訓練開始当初に行っていた弁別課題を構音練習の一環としてだけでなく、難聴に対して音の聞き分けを意図して行うことでより効果が出たのではないかとアドバイスがありました。



アンケートの感想

- ・真面目にこつこつ構音指導に取り組んでいて感心した。
- ・小児言語では全体像を含めた検査・評価の必要性を再確認できた。

- ・複合的な障害を持っている方に対する訓練、一つの障害だけにアプローチするのではなく、全体的な底上げを行うことで課題理解や改善度の違いが出るのではないかとディスカッションを通して知ることが出来た。
- ・教科書通りだけでなく、臨機応変にいろいろな手段を考えるという点は勉強になった。
- ・課題設定については今後より考えることが必要だと思うが、その際に本人、ご家族とよく話し合うことが大切。
- ・この子の難聴が長期間見逃されてきた体制に関して、課題があると思う。

アンケートの感想（全体研修会の今後の形式について）

- ・情勢によって対応してほしい 29名（59%）
- ・WEB開催がよい 18名（37%）
- ・会場型開催がよい 1名（2%）
- ・どちらでもよい 1名（2%）

アンケート（受講中画面共有できないことが）

- ・なかった 48名（98%）
- ・あった 1名（2%）

アンケート（受講中音声途切れたことが）

- ・あった 26名（53%）
- ・なかった 23名（47%）

アンケート（ホームページからの発表者資料のダウンロードについて）

- ・ホームページからダウンロードでき印刷もできた 33名（67%）
- ・ホームページからダウンロードできなかったが、土曜日に送信されたメール添付の資料を利用した 10名（21%）
- ・非会員なので、初めからメールで資料が送付された 4名（8%）
- ・ホームページからダウンロードできたが、印刷できなかった 2名（4%）

アンケート（WEB講義の感想）

メリット

- ・現在の感染状況を鑑みると、WEBで参加できて助かった
- ・コロナ下でも学ぶ機会があってよかった
- ・小さな子供がいる為、自宅に居ながら参加できるのはよかった
- ・移動時間を節約できありがたい
- ・画面に集中して発表を聞くことができた
- ・気軽に参加できてよかった
- ・県外への参加も可能となるのでとても助かる
- ・運営側）準備する物品が減り、費用も安くなる

デメリット

- ・活発なディスカッションが難しい
- ・質問は対面の方が気楽にできる
- ・慣れないせいもあり、受け身になりやすい
- ・発表資料が一日前までHPにアップされず戸惑った
- ・zoomの操作に慣れていない
- ・時々音声割れる、歪む、途切れるなどがあり、聞きづらい部分があった
- ・想定外の機器や通信トラブルがあるのがこわい
- ・出席確認をする事務局は大変だと思う
- ・運営側）zoomに慣れておらず違うところを表示すると元に戻れなくなるなど難しいところ

ろがある

アンケート（研修全体に対して）

- ・症例検討はいろいろな方の意見が聞けるのでありがたい
- ・まだ 1 年目で経験やスキルが足りないが、色々な視点で考えられるようになりたいと思った。
- ・普段と違う領域の話聞く機会がないので、評価の視点など勉強になった。
- ・個人情報の問題はあるが、症例の映像や音声があるとよりイメージがつきよいと思う。

アンケート（希望する研修テーマ・講師）

- ・ST と呼吸器、NST との関わり
- ・認知症のリハビリに対する内容の講義
- ・若年・在宅復帰の患者様に対する評価、アプローチの方法
- ・重度発語失行の症例
- ・失語症や高次脳機能障害、摂食嚥下障害の症例発表
- ・老人難聴がリハビリを阻害している症例で補聴器装用につなげた症例
- ・若手～中堅向けの研修会や症例報告など、悩んでいることを共有できるように
- ・教育分野の ICT 活用と言語療法の連携
- ・高次脳機能障害
- ・小児領域
- ・難聴領域（補聴器・人工内耳）
- ・小児言語、聴覚分野、小児嚥下分野
- ・柴本勇先生の嚥下に対する講義
- ・石野先生から難聴児の言語発達、構音障害に対するアプローチ
- ・五十嵐先生から発達障害のある児の言語発達全般
- ・都筑澄夫先生の成人吃音の評価および訓練方法
- ・小嶋知幸先生
- ・藤野博先生
- ・森田秋子先生
- ・北海道大学 大槻美佳先生
- ・森ノ宮記念病院 椎名英貴先生